

2012年3月20日
於：本郷体育館
東洋学園理事長 江澤雄一

卒業式祝辞

東洋学園大学の卒業生の皆さん、大学院で学位を授与された皆さん、そしてご両親、ご家族の皆様、本日は本当におめでとうございます。本学の理事長としてこの栄あるご卒業の日一言お祝いを申し上げたいと思います。

卒業生の皆さんが在学中の4年間は、世界も日本も激動の時期でした。2008年にニューヨークの大手投資銀行のリーマン・ブラザーズが破綻してから世界の金融界は大混乱に陥り、経済活動も急速に落ち込みました。各国政府は金融機関の救済に乗り出し、中央銀行は資金を潤沢に供給するなど、懸命の対策をとりましたので、とりあえずの小康を得ましたが、その後も景気の回復ははかばかしくなく、世界経済はいまだにその後遺症に悩まされています。

このように景気が低迷する中で2009年にはギリシャの債務問題がクローズアップされ、それに引きずられる形でイタリア、スペインなどの債務問題にも火がつき、各国の国債が暴落することになりました。ヨーロッパはユーロという共通の通貨を使っているわけですが、経済の弱いメンバー国が放漫財政を続けていると共通通貨ユーロそのものが崩壊することになりかねません。ヨーロッパの各国は景気が停滞する中で財政規律をどう維持していくかという、むずかしい課題を抱えることになりました。

こうして欧米経済が苦境にあえぐ中、昨年9月にはニューヨークのウォール街に近い公園に若者が集い、テント生活をしながら「ウォール街を占拠しよう」(Occupy Wall Street)という運動を始めました。彼らの主張は、人口の1%にすぎないお金持ちの人達が巨額の富を一人占めにして、残りの99%の人達

に苦しい生活を強いているのは許せない、特にリーマン・ショックのあと税金を投入して金融機関を救済したのに、危機が過ぎると金融機関のトップは相変わらず年間何十億円もの報酬を受けとっている、それに比べ若者や一般庶民は大量の失業をよぎなくされ、将来への希望を持ってないでいる、かつてのアメリカン・ドリームのように頑張れば誰でも成功のチャンスがあるという世界はどこへ行ってしまったのか、ということです。若者が夢を持ってない社会であるということは、胸が痛みます。この「ウォール街を占拠しよう」という運動はインターネットを通じてアメリカの主要都市はもとより、ロンドンやチューリッヒにも広がり多くの共感者を呼ぶことになりました。

これらの世界の大きなうねりを見ていると、リーマン・ショックが象徴していることは、現代の先進国の資本主義が根本的な問題に直面しているということであり、市場主義の行き過ぎをどう抑えるのか、所得格差や社会階層の固定化をどう打破していくのか、そして人々に支持される新しい資本主義のかたちをどう組み立てていくのかが問われていると思います。資本主義は産業革命以来さまざまな変遷を辿ってきましたが、今ふたたびこの混迷する世界で新しい時代をリードする理念を人々が模索しているということでしょう。

一年前の東日本大震災は日本にとって大きな衝撃でした。しかし、被災後の救援活動、義援金の募集、ボランティアワーク、企業同士の相互支援などは人々の善意と連帯感にあふれており、胸が熱くなるものがありました。ここには経済的打算を超えた人間的な絆が強く生きていていると思います。

日本の経営者には、企業は社会の役に立つものでなければならないという考え方が伝統的であったと思います。近年は短期的な利益を重視するアメリカ的な経営理念が強まり、日本の企業にも経営合理化のプレッシャーが高まったことは事実です。自由主義経済の下ではお互いに競争することが進歩し成長する

ために必要ですし、日本企業も国際競争に勝ち残っていかねばなりません。しかし、企業も社会の重要な構成員であり、社会に貢献することによってその存在を認められるということもいえるのではないのでしょうか。

世界がこれからどういう方向に向うのか、新しい社会の指導理念と企業倫理が求められています。そうした中で東日本大震災を契機に改めて確認された人々の連帯感を基軸にして新しい経済モデルを組立て、日本から発信していくことも重要ではないかと思えます。

卒業生の皆さんがこれから漕ぎだす世界はグローバリゼーションがますます進み、流れの変化も激しいと思えます。しかし、水がよどんでいるより流れていることは新しいチャレンジの機会を与えてくれると思えます。自分のやりたいことを見極め、自らの世界を開拓して行ってください。そのチャレンジに本学で学んだことが少しでも役立つことを祈っています。

本学の卒業生でいろいろな分野で活躍している先輩も沢山居ます。東洋学園の絆を大切にして、同級生、先輩、後輩のつながりをはぐくんで下さい。今年からキャリアセンターの隣に校友会事務局を開設しましたので、卒業生の方々と学校、教職員、同窓会などとの連絡窓口として、ぜひ活用していただきたいと思えます。

では皆さんお元気で、これからの活躍を心からお祈りしています。